

日本語とフランス語の語りのテキストをめぐる一考察 — 『ノルウェイの森 / La ballade de l'impossible』 冒頭部分を例に—

津田 香織
(筑波大学大学院)

本発表では、日本語を原作とする小説とそのフランス語訳を比較し、両語のテキスト構築の在り方の違いについて考える。観察対象とするのは日本語の小説『ノルウェイの森』(村上春樹著、1987年)とフランス語の翻訳書(*La ballade de l'impossible*, Corinne Atlan 訳, 2009年)の冒頭部分(第1章)である。翻訳書は、原作を異なる言語で、原作に近い形で再現することを本義とするものであるが、同時に訳された言語のテキストとしての質も求められる。したがって、原作と翻訳のテキストに現れる違いは、両語の違いの具体的な発現と考えることができる。

違いが顕著に現れる両語の述語形式に注目して、テキストの比較を行ったところ、テキスト中で記憶が問題となる箇所(回想及び回想内容に対するコメント)が、日本語とフランス語とでは異なる方法で描かれていることが確認された。具体的にいえば、日本語の当該箇所は作中人物の「僕」の視点から述べられていることなのか、物語の書き手の「僕」の視点からのものであるのかが確定されないまま、話が展開する。一方、対応する箇所のフランス語訳は、3つの視点、すなわち1) 作中人物の「僕」の視点、2) 物語の書き手の「僕」の視点、そして3) 回想内容を1つの物語として語る客観的視点が、明確に分けられて、交替しながら、話を進める。

このようなフランス語訳のテキストを構築する仕方は、日本語のテキストにおいて不確定な「主観的把握」(池上 2006)をフランス語で実現する翻訳者の解釈と言える(このことで、日本語のテキストに見られる視点の曖昧な状態そのものは翻訳されたテキストには表されない)。また、ある物語を語るために、発話行為の場とは切り離された場、すなわち *récit* (Weinrich 1971, 1989)の世界を明示する志向を持つフランス語と、*récit* 専用の形式を持たない日本語の語り方の違いが表出する一つの例であると考えられる。